

がくじ 学 而

摂南大学図書館報

No.91 2010.3



▲バルトルス[14世紀イタリアの法学者] 著作集 (本館3階展示中)



◀1584年作製の中国地図
天地が西東になっています。
(本館地階貴重図書室)

<CONTENTS>

優生学と生命科学-ダーウィン生誕200年にちなんで	
図書館長 三成美保	2
大学とその合わなかった人たち	
経営情報学部 教授 雨宮孝	4
私と本のつきあい	
外国語学部 教授 植松茂男	6
トピックス	8

枚方分館ニュース	9
図書館利用統計	10
市民利用者の声	11
図書館スタッフのおすすめ図書	12
学生プレゼンコンテスト報告	14
摂大文化大賞、編集後記	16

優生学と生命科学ーダーウィン生誕200年にちなんで

図書館長・法学部教授 三成美保

◆ダーウィン生誕200年

2009年は、ダーウィン生誕200年。多くの関連書籍が刊行された。

チャールズ・ダーウィンが、軍艦ビーグル号での5年間におよぶ航海を終えてイギリスに帰国したのは1837年。翌38年9月、ダーウィンは「自然選択」説の着想を得た。マルサス『人口論』を読んでいるときという。



チャールズ・ダーウィン
(1809～1882年)
航海から帰国した30歳頃

1859年に上梓された代表作『種の起源』は、キリスト教界からは激しい反発を呼び起こした。しかし、本書は「自然神学書」としての体裁をとっている。ダーウィンは、もともと「自然選択」を「神の設定した要因」とみなしていたのである。

『種の起源』は版を重ね、多くの国で翻訳された。日本でも1896年に訳書がでている。

◆キリンの首はなぜ長いのか？

なぜ、キリンの首は長いのか？19世紀半ばに、その説明をしようとした者がいる。ハーバート・スペンサーである。彼はこう考えた——首が長ければ長いほど、より高い木の葉を食べることができる。首が長いキリンが生存競争に打ち勝つ。最適者が生き残るのである——「最適者の生存」(適者生存)説の誕生である。

「最適者の生存」は、ダーウィンの発明物ではない。もとはスペンサーが、『生物学原理』(1864年)で用いた用語である。彼は、「最適者の生存」説と、環境に適應して獲得された性質は遺伝によって後代に引き継がれるというラマルクの「獲得形質遺伝」説(『動物哲学』1809年)を結びつけた。そして、生物進化を含む万物の進歩を「エヴォリューション」evolutionと名付けた。



ハーバート・スペンサー
(1820～1903年)

◆「進化」と「進歩」

evolutionを「進化」とする用法はスペンサーに始まり、スペンサー哲学が熱狂的に支持された1870年代に定着した。

evolutionの原意は、巻物その他の「展開」という意味である。18世紀には、受精卵から形ができていく過程を指すようになっていた。これに対し、一般に「進化」を意味したのは、transmutation(転成)

という語である。もとは錬金術の用語で、卑金属が貴金属に変化することをさした。19世紀には、種の変化、とりわけ、祖先種から現生種への「転成」を意味するようになる。ダーウィンの祖父エラズマス・ダーウィンもま

た「転成」論を著している。『種の起源』でも「進化」にはtransmutationが用いられており、第5版までevolutionという語は使われていない。

ダーウィンはスペンサー説に共感した。『種の起源』第5版(1869年)では、第4章のタイトルを「自然選択、すなわち、最適者の生存」へと変更した。また、最終第6版(1872年)の加筆部分(第7章・最終章)ではじめてevolutionという語を用いる。自然科学概念としての「進化」と価値概念としての「進歩」の境界は曖昧になり、ほぼ同義に乱用される恐れをはらんでいた。

◆進化論を人間社会に適用すると？

ヴィクトリア朝イギリスやアメリカで一世を風靡したスペンサー進化哲学のように、進化論を人間社会に適用する考え方を「社会ダーウィニズム」とよぶ。「社会ダーウィニズム」は、1870年代以降、第1次大戦直前まで欧米で大流行した。これにはさまざまな潮流があり、政治的にも左右両極を含む。しかし、キリスト教的世界観に代えて自然科学に拠る所を求める点では共通していた。

「社会ダーウィニズム」を支持したのは、「良識的なふつうの白人男性」を自認する人びとである。彼らはこう考えた。「<劣った>人間は淘汰されるべきである」。

<良識>は、ときにとてつもない圧力となる。それは、社会的優位者の価値観にすぎない。安定した中流家庭を築いている白人男性から見れば、徴兵検査不合格者、義務教育についていけない者や精神障害者、犯罪者、売春婦や性病罹患患者、中絶の自由を主張する女性たち、アジア系移民、ユダヤ民族——これらすべてが「社会不適格者」になる。

◆「優れた者を改良し、劣った者を排除せよ！」

「不適格者」を排除し、「適格者」の資質をいっそう伸ばそうとする考え方を「優生学」という。自然界の長期にわたる「自然選択」を、人間社会では「人為選択」により短期で実現しようとするものだ。ひとたび<劣る>とみなされるや、生存が否定される。

1883年、ダーウィンの母方従兄弟にあたるフランシス・ゴルトンは、ギリシア語由来のeugenes(良き生まれ)をもとに「優生学」eugenicsという新語を生み出した。「優生学とは、ある人種の生得的質の改良に影響するすべてのもの、およびこれによってその質を最高レベルにまで発展させるための学問である」(1904年ゴルトンの定義)。

新しい学問としての優生学は、20世紀前半に欧米諸国で広く受け入れられた。拠点はイギリスとアメリカである。とくに、スペンサー説の強い影響を受けたアメリカでは、いち早く優生法制が整った。1899年の少年院収容者への断種を皮切りに、精神障害者やアルコール依存症

者の結婚制限法（1905年）、世界初の断種法（1907年）を経て、1914年までに30州ほどが優生立法をもった。

なかでも、ナチス断種法（1933年）のモデルとなったのが、カリフォルニア州断種法（1909年）である。性犯罪者、累犯者、精神障害者、同性愛者、梅毒患者、未婚の母などが強制断種の対象とされた。また、絶対移民制限法（1924年）によってアジア系移民が制限され、日系移民への差別が強まったのも優生学の影響である。

◆「健康大国」ナチス

ナチスは、「健康大国」をめざした。国民のX線検診を進め、保健所の全国ネットワークを完備した。ガン研究に膨大な予算をつけ、タバコ・アルコールの害をさかんに説いて、「国民の健康」増進にやっきになった。

<異>はここにある。ナチス的基準の「国民」、ナチスが期待した「健康」。そこには、ユダヤ人もポーランド人もロマ（いわゆるジプシー）も含まれない。

「共同体の異分子」たるドイツ人も「帝国のガン」として抹殺された。ナチス体制を批判した政治犯、同性愛者、「人種の恥」（ドイツ人以外と性的関係をもった者）、精神障害者、アルコール依存症者などである。

「人種衛生学」（ナチス優生学）に照らして「健康」でない者は、<劣等>として切り捨てられた。アメリカの優生学者たちは、第2次大戦に参戦するまで、人種衛生学とナチス断種法を賛美し続ける。

◆裁かれた罪と裁かれなかった罪

第2次大戦の戦争犯罪は2つの国際軍事法廷で裁かれた。ニュルンベルク裁判と東京裁判である。

ホロコーストを裁いたニュルンベルク裁判に続き、ドイツではアメリカ主導で12の継続裁判が行われた。そのなかに「医師裁判」がある。強制収容所で実施されたいくつかの人体実験の関係者が被告席に登った。しかし、実験データをアメリカに提供するのと引き替えに刑を減免された被告人も多い。また、ナチス司法に関わった法律家も戦後、ほとんどが復職した。ホロコースト以外の優生学的な非人道的行為は、必ずしも裁かれなかったのである。

◆「生命倫理」を問う

ナチス断種法や医師による人体実験を徹底的に弾劾できなかったのは、連合国でも同じことがなされていたからである。とくにアメリカでは戦後も、精神障害者や黒人・ヒスパニック系女性に対して強制断種や人体実験が実施されていた。

1965年、ニュルンベルク医師裁判の判決文の一部が「人体実験に関する倫理綱領」（ニュルンベルク・コード）として国際社会で認知された。「インフォームド・コン

セント」原則が確立し、「生命倫理」（バイオエシックス）時代が幕を開ける。

アメリカ主導の「生命倫理」には、1つのロジックがついてまわる——<巨悪>ナチスvs<善>個人主義的優生学。ナチス的な国家主義的優生学をタブーとする一方、医学の発展や個人の選択による優生学は認めるという図式である。1969年、ヒトゲノム計画の立案者の1人ジンスハイマーは、後者の考え方を「新優生学」と名付けた。

人体実験からはじまった「生命倫理」に関わる問題群は、先端生命科学の急激な発展とともに、やがて「生命の始期と終期」、「医療経済の肥大化」へと広がる。日本はどうか。ナチス断種法にならった国民優生法（1940年）を「改正」して生まれた優生保護法（1948年）が事実上の「中絶自由法」として機能したため、生命の「終期」（脳死）ばかりが議論にされ、生命の「始期」についてはいまなお十分な議論がない。法律も未整備である。臓器移植法はあるが、代理母や男女産み分け、着床前診断等を包括的に規制する法律は存在しない。クローン規制法は事実上の「容認法」と言われる。優生学も精算されていない。優生保護法は、精神障害者やハンセン病患者の断種を認めていた。断種規定を削除し、母体保護法に変わったのは、1996年のことである。

◆赤ちゃんを設計する！？

ナチスは人間の<改良>を求めて人体実験を重ねたが、失敗した。だが、いまの技術は違う。遺伝子进行操作し、望み通りの赤ちゃんを得ることも夢ではない。「デザイナー・ベビー」である。

人間の能力を改善・増進させることを「エンハンスメント」（増進的介入）という。広義には、ドーピングや美容整形、向精神薬服用などを含む。狭義には、遺伝子治療やクローン技術、受精卵（胚）段階での遺伝子操作などをさす。この是非をめぐるのは、欧米で大論争がおこっている。「世界超人協会」（1998年創設）なるNPOは、狭義のエンハンスメントを強く支持して非常に危険視される一方で、多くの学者を引きつけ、相当数の著述を発表している。

人は、不老不死や美、健康に飽くなき欲望をもつ。このため、バイオテクノロジーは莫大な富をよぶ。ナチスの悪夢を踏まえ、長く胚研究を抑制してきたドイツでさえ、「経済的チャンス」の魅力に勝てず、2001年に方向転換した。

2010年、本学にも生命科学科が誕生する。先端生命科学の発展と「人間の尊厳」や自然環境との調和をどうはかるのか。「生命」操作はどこまで許されるのか。ダーウィン生誕200年を迎えた現在、人類という「種」の根幹に関わる問いがなされている。



ナチス期の優生学ポスター
「1人の酒浸り女から産まれた恐るべき子孫たち—7人の殺人者・67人の重罪犯・181人の売春婦など、彼らには500万マルクもかかる」



受精後7週目のヒト胚

大学とそりの合わなかった人たち

経営情報学部 教授 雨宮 孝



最近の大学はどこもFD活動でにぎやかである。大学の自己点検に端を発したと思われるこの運動は、どうも学生アンケートに代表されるようである。FD活動にあまり熱心でない教員を「深海魚」と呼ぶらしい。ただ、学生におこなう「教師に熱意が感じられるか」という質問には戸惑うばかりである。

いらざる関連をすべてそぎ落とさなければ出来ぬ仕事もある。司馬遷は武帝の怒りを買ひ、刑罰に服した後、生ける屍のようになりながら史記を完成させたという[4]。故宮博物館に行くと親子3代にわたり細工を続け完成させたという工芸品を目にすることができる。これを作った人たちの生活はどうであったろうかと想像してしまう。生き生きとした生活をしたとは到底思えぬが、秘めた熱意が長期の困難に耐えさせたのであろう。表向きの活発さが熱意情熱を測る道具では必ずしもないことを理解しなければ、人間の意図、試みの多くの部分の評価はできぬのではない。エマヌエル・カントが毎日、時計仕掛けのような正確さで3時半に8回だけケーニヒスベルグの菩提樹の並木道、今なお哲学者の道とよばれる、を往復して散歩し、「ほとんど抽象的といえる」ような生活をくりかえしながら『純粹理性批判』を書きあげたのは有名な話である。人々はその姿に時計をあわせ、親しげにあいさつしたという。しかし、彼がテロリズムともいえる不気味な仕事をしている（当時世間の神に対する気持ちは今とは違う）とは誰も思わず、教える熱意があるかとは誰も聞かなかっただろう。古き良き時代というのはこのような時代を言うのであろうか。昔は大学に問題はなかったのでしょうか。そうとも思えない。今までも大学とそりの合わなかった人達は数多い。今明らかになっている、そのような人たちの多くは、全く興味深い人生を歩んでいる。選択は独断と偏見のままにすこし見てみたい。

1. ハイネ

ハイネは1820年にドイツのゲッティンゲン大学に入学したが、決闘事件を起こし停学となり、いったん退学し、再び1824年ゲッティンゲン大学に再入学する。もっとも彼はちゃんと大学を修了し博士になっている。彼の「ハルツ紀行」はゲッティンゲン大学に再入学したときに執筆された。ハルツ地方を旅行した時

の紀行文である。生き生きとして楽しい文章であるが、大学について面白い記述がある。すこしみてみよう。

「一般にゲッティンゲンの住民は学生と教授と俗物と家畜に分類されるが、この4つの階級の区別は決して厳密なものではない。家畜階級が最も重要なものだ。」「このような大学都市には学生の絶えざる去来がある。そこでは3年ごとに学生の新しいジェネレーションが見られる。それは永遠の人の流れであって、この流れで学期の波が次から次へと押しやられる。ところが古い大学教授だけは物皆が流れるこの運動に合って動かずエジプトのピラミッドのように揺らぐことなく頑張っている。——ただこの大学のピラミッドのうちにはどうも知恵というもの

が少しも蔵されていないのである。」
どうもこのあたりは最近の大学でよく聞くセリフとよく似ている。深海魚とピラミッドはどこか共通する概念である。しかし、よく見るとちょっと違う。かれの攻撃の対象はあくまで変化しないスタイルではなくてコンテンツである。このような人に「何ら知恵を含んではいない」といわれるならば、苦笑する以外にないが、彼はコンテンツと表現手法とを明確に区別している。別な場所にある彼の文章をもう少し見てみよう。

『ドイツ宗教・哲学史考』の中で彼はカントとロベスピエールをならべ面白い考察をしている。彼によると、どちらも本来乾物屋の店員にでもなってコーヒーや砂糖の測り売りをしているのがふさわしかったような厳格で律儀な人間である。しかし、運命は彼らを哲学者と革命家にしてしまった。間違っても革命の指導者になったロベスピエールはその律儀さを発揮して国王を測りに載せ断頭台に送った。ところで哲学者になったカントはもっと大胆であった。彼は神を測りに載せたのである。「イマヌエル・カントはテロリズムという点でマキシミリアン・ロベスピエールをはるかに凌駕している」。「同列に置くならばロベスピエールに敬意を表しすぎることになる」。しかしその表現手法について彼は続ける。「しかしなぜカントは彼の学説をあのような生気のない、ひからびた包装紙のような文体で書いたのだろうか。彼は・・もし学問が平易で特に明るい調子で述べられるのであれば、学問はその権威をいく

らかでも失うであろう・・・と考えたのであると思う。それで彼は精神の低い階級の一切の馴れ馴れしさを冷たく拒否する堅苦しい抽象的な形式を与えたのである・・・ここに彼の俗人根性がまるだしになっている。」しかしハイネは言う。「慎重に測定された思想の歩みを表すためには、慎重に測定された言葉を必要としたのであろう。」ここで親子3代に渡って彫り上げた作品を連想してしまう。「新しい考えを新しい言葉で表現するのは天才の技である。カントは天才ではなかった。」

新しい思想を新しい機知にとんだ言葉で表すことと、慎重に精緻な理論、精巧な工芸品の構築を進めることとは別なタレントなのである。何か今日の問題と共通するものがこの記述のなかに感じられる。ハイネは続ける。「しかしこの文体は多くの災いを引き起こした・・・。」

私が思うのは、表面の裏奥に潜む、ことの大きさを感じる感受性と評価する教養がやはりなによりも重要なものであり、表層に現れる表現の俗物性はただ、笑えばいいのではないか、そのことは今もむかしも変わらないのではないか、ということである。（この項引用はすべて[1]から）

2. ガロア

ガロアについてはよく知られており、数学者でもない私がここで取り上げるには全くおこがましいくらい顕著な業績を残している。かれは1811年10月に生まれ、1832年5月、20歳にして決闘で若い命を失っている。彼ははやくから数学的才能を表し、独自で第5次方程式の解について考察している。彼も大学に入学を試みている。それも2度。不幸はこの時から発生した。自信に満ちていた彼は、最初は17歳でなんの用意もなく有名なパリのエコール・ポリテクニクを受けて失敗した。しかし、その最初の失敗については、25年のちになって数学雑誌の編集者が総括している。「知力のすぐれた受験者が知力の劣った試験官にかかって落ちた。」と。

2度目の受験は伝説となっている。大学の試験官の問題と対応がガロアの気に入らなかった。返事を笑った試験官に、少しのやり取りの後、黒板拭きを投げつけて退席した。以後アカデミズムと離れたところで研究を続けている。彼は業績をまとめ、学士院に19才で数学大賞を狙って論文を投稿したが、その論文は何かの間違いがあったか日の目を見ることはなかった。かれは情熱的に革命運動に走り、決闘で果てた。

決闘の前日に自分の数学の仕事を書き残した彼は「時間が無い。」という叫びも書き込んでいる。これまでにアカデミズムが圧殺した業績は枚挙にいと

まないであろうが、アカデミズムの住人が果たしたネガティブな役割がこれほど大きな悲劇的な影響を及ぼした例も少ない。彼の死後業績を整理したのはリュールである。しかし、リュールは言う。「著名な数学者たちが、天才にあふれているが未経験なこの初心者、を、厳しい忠告によって正道に帰らせようと努めたのも今ではうなずけることである。この若者は熱心でもあったし、積極的でもあったから・・・それもできたはずである。」そして続ける。「事態はすっかり変わってしまった。無益な批判にふけるのはやめよう。」その仕事を整理したとき、「2、3のわずかな空白を埋めてガロアの方法の完全な正しさを知ったとき私は強烈な喜びを感じた。」[3]60ページしかない業績は今なお重要である。

これらの偉人たちをこんな簡単な紹介で終わるのはいかにも失礼であるが、より精密に解説するとうような大それたことができるわけでもない。また、このテーマで紹介したい人たちはまだたくさんいる。しかし、あまり紙面もない。これらの人たちの伝記などぜひ読んでいただきたい、とのみ思う。

教員が、また学生が無感動になることの影響の大きさをこれら伝記は警告しているように感じる。表面の裏側に潜む事の重要性を認識する感受性の必要なことは、教える方、教えられる方とておなじである。大学というところはまずその感覚を磨くことを学ぶべきところなのではと思う。学ぶものの多さと難しさを知ったとき、知識は増えるのではないか。

しかし皮肉なことに、世の大学がF D活動に活発になっていくのと裏腹にモンスター・ペアレントなるものが次第に登場してきているような印象がある。かれらも多くは大学に籍を置いた経験があるのではないかと思うが。

「そりが合わない」とは刀身と、鞘とのそり具合が合わずに、鞘に収まらないことからくる、ということよく知られている。日本刀の鞘はいかに美しいが、刀身と合わなければまるきり役に立たない。鞘はしかし、他も自身も守るものである。これらの人たちに共通するのは強烈な個性で既成の鞘には到底おさまらない激しさである。しかしながらその強烈な個性は極めて魅力的であり、共鳴を感じてやむことが無い。大学にいながら、むしろ憧れに似た気持ちをもつのは私一人ではないであろう。俗物の憧れである。

参考文献

- [1] 井上正蔵、「ハイネ」、筑摩書房、世界文学大系。
- [2] インフェルト、「ガロアの生涯-神々の愛でし人」。
- [3] ベル、田中・銀林訳、「数学を作った人々」、東京図書
- [4] 中島敦、「李陵」。

私と本のつきあい

外国語学部 教授 植松 茂男



たしか小学校3年生の誕生日に、生きものの好きな私に母親が「シートン動物記」、「ファール昆虫記」を買ってくれた。それが私と読書のはじまりだったかもしれない。ちょうどその頃国語の課題で、米国の小説家ロフティングの「ドリトル先生航海記」について書いた感想文が校内表彰を受けて子供心に嬉しくなり、堰を切ったように読み出した。ちなみに「ドリトル先生」がDr. Dolittle（何にもしない先生）という意味だとわかったのは高校生になってからのことである。当時、本はまだ高価だった。小学館から発行されていた全部で50巻くらいだったと思うが「少年少女世界の名作文学全集」がたいそう面白く、時間を忘れて読みふけた。私の図書館通いの始まりである。日本をはじめ、世界中の名作が読みやすい文章に翻訳され、絵も時に当時は珍しいカラーを交えて挿入されていた。5年生が終わるまでにほとんど全巻読んだと思う。その中で特に私の心を捕らえた一巻がゲーテの「ファウスト」、トーマの「悪童物語」、シェンキービチの「クォ・パデイス」、フェルスターの「アルト・ハイデルベルク」、レアンダー童話集を収録したものであった。この巻を含めて何冊かは買ってもらったのだが、惜しいことに今は手元にない。

中学校に入学してからは明けても暮れてもクラブ活動で、読書から遠ざかった。高校では数学や理科科目が好きになった。この頃最も影響を受けたのが、動物行動学者ローレンツの「攻撃」や「ソロモンの指輪」などの著作で、生物の「臨界期」の概念はその後、私が現在の専門分野にした「言語習得論」と深い関係がある。

高校生活は駆け足のように過ぎ、受験を迎えた。生来怠け者の私は受験勉強から逃避するかのうちにまた読書を再開した。今度は安価で軽い文庫本が中心であった。芥川のように短編中心の作家から読み始め、次第に漱石、川端康成などのとりこになった。外国文学も復活した。やはり性にあったのかゲーテ、マイヤー、ヘッ

セなどドイツの作家が中心であった。理科系クラスだったので、数学や物理・化学の時間がふんだんにあり、「内職」のやり甲斐があった。放課後はもちろん図書館。でも閉館時刻が早かった。

大学は文学部を選んだ。子供の頃からの夢だった「ファウスト」や「悪童物語」、特に高校時代愛読したマイヤーの短編集を原書で読むことを目指し、ドイツ文学科へ進学した。研究室に通うようになってはじめてわかったのだが、「護符」(Das Amulett)等の歴史短編小説で知られるスイスの作家マイヤー(C. F. Meyer)を扱う先生はその大学にはおられず、原書は短編のレクラム(ドイツの文庫本)1冊すらなかった。

「悪童物語」(Lausbubengeschichten)の著者トーマ(L. Thoma)は、ドイツ・バイエルン地方の日常を生き活きとしたタッチで描いた作家であるが、こちらも全集はおろか、レクラムすらなかった。仕方なく自分でこの二人の全集を研究室経由で注文してもらった。

マイヤーの文章は端正で比較的平易であるが、ドイツ、フランス、イタリアに囲まれたスイスという小国の宗教や領土を巡る戦争に翻弄されつづけた歴史への基礎知識がなければ、薄っぺらくしか読めない。トーマは農村の方言を使った偉大なストーリーテラーであるため、方言を調べるための何冊かの分厚い辞書やレクラムの方言用語集を手放せない。空いている時間は大学の図書館の片隅で閉館まで過ごした。余談であるが、摂南大学に着任した1996年当時、英語教室の主任はドイツ文学の先生であった。この先生はマイヤーのことをよくご存じで、マイヤーをはじめドイツ文学論議に随分楽しい時間をいただいたことは僥倖以外の何でもなかった。

前後するが、幸い「ファウスト」だけは大学院の演習科目にあったので参加させてもらった。輪読形式でI部のみであった。物語り部分はよくわかるのであるが、抽象的な表現や背景知識については毎回膨大な量のコンメンタール(関連

資料)を調べていっても、肝心な部分は半分も理解できなかったと思う。『天上の序曲』では「ノストラダムスの大予言」で有名な「ノストラダムス」という人名が引用されていることにひどく驚いたことしか覚えていないという有様である。情けない話で、その後また翻訳に頼った。自分のドイツ語力、西洋古典、歴史、宗教などの教養のなさがよくわかったからである。

それで吹っ切れて今まで読んでいなかったゲーテ作品「イタリア旅行」、「親和力」、「詩と真実」などを次々と訳本で読んでいった。時々、原文を見たくなる時があって参照すると、訳者の苦勞がよくわかる。ゲーテの原書を読みこなすのが不可能と感じている時に会った本が、晩年のゲーテに書生のように師事した若者、エッカーマン(J. P. Eckermann) 作の「ゲーテとの対話」(Gespräche mit Goethe)という日記である。

森羅万象に通じたゲーテを(ワイマール版原書110巻のうち文学関係は約半数である)心から尊敬し、ゲーテの日常の言葉をそのまま記した貴重な記録である。この本を読んでいるうちに、ゲーテを再び身近に感じるようになった。ゲーテの一言一句をできるだけそのまま伝えようと、する謙虚で真摯な姿勢は、読み手に共感を持たせると同時に、ゲーテが途方もなく巨大な「知」の体系であることも知らしめる。

ある時は「素晴らしい物への身震いするほどの感動」が人の教養の根源であるとプラトンの「イデア」に言及し、またある時は「色彩論」でニュートンの誤りを指摘し、またある時は芸術に於ける天賦の資質についてラファエロを引き合いに出し、一生中途半端な仕事をし続ける画家や芸術家へ警鐘を鳴らす。もちろん文学については当時のあらゆる作家の名前が登場する。特に同時代人のシラーの名前が繰り返し出てくる。ある時はその豊かな才能を褒め称え、またある時は自らの自然科学への造詣の深さの見地からシラー後年の浪漫主義への転向を批判する。のちに浪漫主義究極の哲学者ニーチェがゲーテの主観と客観の間にある思想を礼賛してやまないまま早世したのは皮肉な話である。パイロンに対してもしかりである。希有の才能を持ちながら身を持ち崩し、30代で世を去ったこの若者の生き方について蕩々と嘆く。英文学にも堪能なゲーテであるからこそできる話である。

しかしシェークスピアに関しては手放しの礼賛で、当時はまだ「馬が話す言葉」と言われていたドイツ語でドイツ文学を確立するのが自分の使命だと、この天才に学んだようだ。

「シェークスピアは銀の皿に金の林檎をのせて、われわれに差し出してくれる。ところがわれわれは、彼の作品を研究することによって、なんとか銀の皿は手に入れられる。けれども、そこへのせるのにじゃがいもしかもっていない。これではどうにも恰好がつかないな」(1825年12月25日 山下肇 訳 岩波文庫、以下同)

人生訓も多い。

「安楽な、趣味のある家具にとりかこまれていると、私の思考はとまってしまい、のんびりした受け身の状態になる。若いときからそういうものに慣れている人は別だが、はなやかな部屋や、しゃれた家具などは、思想のない、あるいは思想を持ちたくない人々のためのものだ」(1831年3月25日)

「どんな場合でも、人は自分が愛している人からしか学ばないものだ」(1825年5月12日)など。

ゲーテは体系的に物を学ぶことを重要視し、「独創的なものなどこの世にない」と言う。それは己の狭い見聞に左右されず、既に過去に誰かが極めたことであるとの確信があるからである。「学会の権威」、「世界的権威」等という言葉が先端科学以外の分野で安易にマスコミに出る度に懐疑的な気分になる私の性分は、多分この若き日のエッカーマンを通したゲーテとの出会いに由来するのであろう。

今でも読書における挫折は変わらない。この年になってもまだ読めない、読んでいない本は山ほどある。時間があつたらまた学生に戻って図書館で終日過ごしたい。今は池澤夏樹が河出書房新社から刊行を開始した、20世紀後半の作品を個人的視点から網羅した風変わりな「世界文学全集」が気になっている。好きなグラスの「ブリキの太鼓」も収録するとのことである。私にとって図書館こそあらゆる知の出発点であった。これからの知性を育ててゆくためにも、大学の図書館は開館時間が長ければ長いほどよい。ただし、利用する人々は知人と会っても大声で喋ってはいけない。本に会うために、もしくは与えられた課題を他人の迷惑にならぬようこなすためだけに入館してほしい。居眠りもよい。ただし、いびきをかかないこと。

トピックス

AV機器を入れ替え ノートパソコンの館内貸出開始!

= 後援会から寄贈 =

後援会から図書館に対して、A V機器およびノートパソコンの寄贈があり、有効利用できるように整備をしました。

視聴覚資料閲覧および学習支援のためのA V機器として、本館に50型プラズマテレビ1台、26型液晶テレビ1台、22型液晶テレビ10台、DVDプレイヤー3台を、分館に22型液晶テレビ3台、DVDプレイヤー3台を、旧機種と入れ替えるなどして設置しました。



50型プラズマテレビは、本館3階第2グループ閲覧室に設置しており、パソコンと接続できますので、プレゼンテーションの演習が可能です。



自己学習支援のため、館内貸出用ノートパソコンを本館に8台用意しています。このノートパソコンは最新のWindows7搭載機で、Office2007Standardがインストールされており、Word、Excel、PowerPointで、レポートやプレゼンテーション資料の作成ができます。また、無線LANによるインターネット接続も可能です。なお、作成したファイルは持参のUSBメモリー等に保存して持ち帰ってください。

学生選書ツアーを実施

「学生選書ツアー」を昨年12月5日、紀伊國屋書店梅田本店で、7名の学生の協力を得て実施しました。約100冊が選書され、図書館に配架されています。書店で実物を見て選書できるこのツアーを今後も定期的実施する予定です。



枚方分館ニュース

枚方分館では、学生の皆さんに多様な蔵書を利用いただけるように、一年を通していろいろな取り組みを行っています。今回はその一部をご紹介します。

★軽雑誌の譲渡★

枚方分館では、年2回程度、保存期限が切れた軽雑誌を譲渡しています。

毎回楽しみにしてくれている人も多いのですが、2日ほどでなくなってしまうものもあります。

『NEWTON』『non・no』『smart』などお目当ての人気雑誌はお早めに！



★特集コーナー★

<残暑見舞いリラクゼーションフェア>



写真集を中心に、試験勉強に励む学生の清涼剤になればと企画しました。一番の人気は写真中央の大型本。『水の中の光と時間』デヴィッド・デュビレ撮影、本木宏太郎訳、ファイドン刊。図書館HPのベストリーダーにはランクインしていませんが、教科書を除いて2009年度中で一番たくさんの学生が手に取った本です。

<年末年始クラシックフェア>



年末といえば第九。映画やCMなどで意外と耳にするクラシックに親しんでみましょう。聴くのはもちろん、作曲家の波乱の人生を知ったり、音楽がモチーフになっている作品を読んだり……いろいろなアプローチができるよう工夫しました。

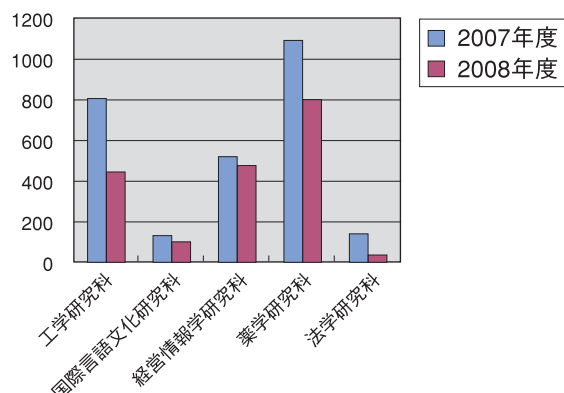
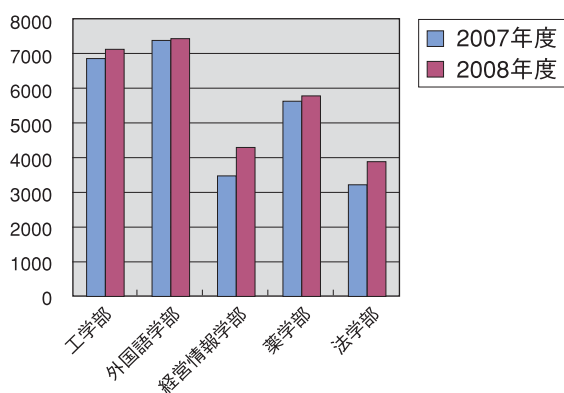
図書館利用統計

図書館では、よりよい図書館運営のために、利用状況の調査、アンケートの実施などを行っています。ここでは、2008年度利用統計と2009年度上半期に本館で貸し出しの多かった図書について報告します。

★入館者数・貸出冊数★

区 分		本 館	分 館	計
開館日数	2008年度	274日	280日	—
	2007年度	268日	282日	—
入館者数	2008年度	214,496人	147,696人	362,192人
	2007年度	188,374人	162,119人	350,493人
1日あたりの 平均入館者数	2008年度	783人	527人	1,310人
	2007年度	703人	575人	1,278人
貸出者数	2008年度	15,735人	4,822人	20,557人
	2007年度	14,180人	4,395人	18,575人
貸出冊数	2008年度	29,384冊	8,086冊	37,470冊
	2007年度	28,445冊	8,451冊	36,896冊

★学部、研究科別貸出冊数★



2008年度の入館者数は前年度比約3%増となり、貸出冊数も増加しました。

本館・分館別では、入館者数・貸出冊数とも本館で増加、分館で減少になりました。貸出冊数をみると学部生は増加していますが、大学院生で大幅減でした。今後、本館では新学部・学科の設置、分館では薬学部6年制の年次進行とともに学生数増が見込まれますので、館内の整備を引き続き行っていく予定です。

●2009年度上半期図書貸出回数ランキング (本館)

順位	タイトル等	貸出回数
1位	流星の絆／東野圭吾著	18
2位	聖女の救済／東野圭吾著	12
3位	告白／湊かなえ著	11
4位	図書館戦争／有川浩著	10
5位	レンタル・チルドレン／山田悠介著	9
5位	ニホンブンレツ／山田悠介著	9
7位	ゴールデンランパー／伊坂幸太郎著	8
7位	パラシュート／山田悠介著	8
7位	別冊図書館戦争／有川浩著	8
7位	英雄の書／宮部みゆき著	8
7位	新TOEICテスト全パート完全攻略：高得点を可能にする正解のコツがわかる！／石井辰哉著	8
7位	マンガ宅建はじめの一步：マンガで読む『入門書』の決定版！1冊だけで“宅建”がまるごと、パッチリわかる／久保望原作：井上のぼる著	8

2009年度上半期に貸出回数の多かった図書は左表のとおりです。ミステリー小説が上位を占める結果となりました。この順位以下でも引き続き東野圭吾氏、山田悠介氏の図書がランキングされており、根強い人気うかがえます。

「大学の図書館について」 —市民利用者の声—

佐々木 雄二

私は寝屋川市在住の一市民（70才）です。摂南大学で本をお借りして読ませていただいています。

本当にありがたく感謝しております。希望として、貸出冊数と期限をそれぞれ5冊、3週間へと緩和していただきたい（現在は市民利用の場合3冊で2週間の期限）と個人的に思っています。但し、注意事項のルールを3年間違反していない者にかぎって、というのが私の思いです。

さて図書館は立派になりましたが、大学生の「本」離れは年々増すばかりです。せんだって副学長の奥林先生と会話する機会（ノーベル化学賞受賞の下村先生の講演会場で）があり、副学長も頭を痛めておられました。私も同感であります。

どうすれば大学生が図書館を活用することができるか、最高学府の学生が少しでも、この図書館を利用するための方法を考えてみた、というわけです。

提案

まず、課外（専門外）の「本（雑誌は除く）」を年間何冊読むのかを入学したときに自己申告をさせるのです。もちろん借りる時に課外（専門外）の本であることを正直に申告するものとします。

図書館は年間、課外「本」の目標値を登録した人のチェックをし、返却時に累計をしていく。

その中で各先生の推薦図書も3冊以上読むこと、その内1冊は読書感想文を提出するものとするというのはどうでしょうか。

感想文は推薦した先生が評価するとともに、最終評価は図書館長と関係者が行い、大学としてそれを表彰し図書券を贈呈してはいかがでしょうか。

以上が私なりの図書館利用促進策です。細かいルールは大学で決めていただければと思います。

摂南大学がよき大学に成長発展していけることを願っています。

<図書館の市民利用について>

生涯学習等の一助として図書館を一般開放しています。利用資格等はつぎのとおりです。

・利用資格

20歳以上で寝屋川市、枚方市、守口市、門真市、四條畷市、交野市、摂津市、茨木市、高槻市、島本町、八幡市、京田辺市の市民で、学習・研究目的のために利用される方

・利用登録手続き

- 1.登録申請書に必要事項を記入、押印のうえ提出してください。
- 2.本人確認ができる公的書類（運転免許証等）を提示または提出してください。
- 3.写真（2.5×3cm）を2枚提出してください。
- 4.登録料として1,000円を納入してください。
- 5.利用登録は1年単位です。登録期間満了後3カ月以内に登録を更新する場合は、登録料は無料です。

図書館スタッフの おすすめ図書



摂南大学図書館寝屋川本館で働いている図書館員 3 名に
おすすめの図書をあげてもらいました（当館にも所蔵されています）。

『プリンセス・トヨトミ』

万城目学著

文藝春秋

内容：このことは誰も知らない。五月末日の木曜日、午後四時のことである。大阪が全停止した。長く閉ざされた扉を開ける“鍵”となったのは、東京から来た会計検査院の三人の調査官と、大阪の商店街に生まれ育った二人の少年少女だった一。前代未聞、驚天動地のエンターテインメント、始動。大阪が全停止？著者が満を持して贈る大阪に秘められた衝撃の真実とは!?女子になりたい中学生・大輔と彼を守ってきた幼馴染の茶子。彼らが暮らす空堀商店街に会計検査院の調査官三人の手が伸びる。

紹介文：舞台となるのは、地元大阪。大阪城、京橋、大阪府庁等、自分たちの町の風景が図書の中にあります。大阪人なら読んでいて2倍楽しめるのではないのでしょうか。親しみやすい大阪を背景にして登場してくるのは、ごく普通の少年少女…自分の信念を守るため奮起して闘うことに大人も子どももない、そして闘う自分の傍に居てくれる・ともに闘ってくれる存在がどれだけ大切か、それを教えてくれる一冊です。

是非、読んで見て下さい。そして読み終えた後、たぶんあなたは大阪城を見たくなるでしょう！

『プロフェッショナル 仕事の流儀』
茂木健一郎 & NHK「プロフェッショナル」制作班＝編
日本放送出版協会

「本を読むことで他人の人生が経験できる」とはよく聞く話だが、本書はまさにそうである。プロフェッショナルを「自分の流儀にしたがって仕事を積極的にこなしていく人。輝く個性を持ち、他の人たちとのコミュニケーションにたけ、仕事を通して社会の中に喜びを生み出すことができる人」と定めたマニフェストを掲げ、様々な職業のプロたちに密着して話を聞くことで、仕事の奥深さや働くことの醍醐味を伝えることを目的としている。

その内容は、全く飽きさせない。臨場感溢れる「仕事の現場」から始まり、プロフェッショナルたちの「道具」の紹介、経験が具体的に語られる「ターニングポイント」、さらにはずばり「プロフェッショナルとは」という問いかけ。脳科学者・茂木健一郎氏の視点も交え、息つく間もなく展開される。「科学はスポーツだ」、「情報源は半径三メートル以内」など、プロたちから飛び出す目から鱗のことば。その真相とは・・・。

誰の中にでもあるという「プロフェッショナルの種」を育むべく手にとりたい一冊。人生の指針となることばに出合えるかもしれない。

『EARTH'S CHILDREN』

エイラ地上の旅人<1>～<13>

ジーン・アウル作 大久保寛訳

ホーム社

《衝撃の1冊》まさにこの言葉がぴったりの本を紹介します。

舞台はマンモスが生きていた時代、全く想像できない設定に最初はかなりとまどいましたが、それをクリアすると、影響されやすい私は、生活まで影響されるぐらいに・・・。

この本は、以前、児童書として日本で翻訳され、あまりの内容の過激さに、大幅に削除手直しされた経緯があります。作者はとても心を痛めていたそうです。のちに、成人翻訳ものとして日本で出版されたものが今回紹介した本です、その本に作者はこう記しています。

くこのシリーズはもともと大人の読者のために書かれたものでした、本当は、私のため、そして現代人に極めて近い人類が地球上にはじめて登場した時代に生きていた普通の大人の、複雑で洗練された生活を、私と同じように理解できる人たちのために書いたのです。この度日本で、原作に忠実に翻訳しなおされ、皆様にオリジナルの作品を読んで頂けることが出来るのを、とてもうれしく思います。

ジーン・M・アウル>

「学生プレゼンコンテスト」報告

メディア勉強会部長 吉近夏未（法学部）

摂大祭1日目、図書館主催のプレゼンコンテストが図書館「プチテアトル」で行われた。テーマは「大学への提言」。参加は6チーム。それぞれが個性的な提案をした。

「石本チーム」は、大学のトイレにジェットタオルの設置を求めた。まず学生にアンケートをとり、使い捨てハンカチやジェットタオルのニーズを確認。その後設置に向けて、業務用タオル、ジェットタオル、使い捨てハンカチについてのコストを比較。設置費用はかかるが長期的に見ると一番安いコストですむジェットタオルの設置を提案した。商品の評価になってしまった部分があったが、設置への具体案が盛り込まれており、一番実現可能性の高いプレゼンとなった。

外国語学部里井ゼミより参加した「SATOIゼミオールスターズ」は、よりよい学生生活を送るために、学生参加型の食堂作りを提案。第1・第3食堂に利用者が集中し混雑している点に注目し、ピーク時にも空いている第2食堂の改善を現状の課題とした。食堂が混雑すると午後の授業に遅刻する可能性が増すので、食堂の利用機会は平等でなくてはならない。第2食堂が活きない原因として、第1・第3が人気となっている理由をあげ、第3食堂の良い点を取り入れる、第1食堂の様な入りやすい雰囲気を出すため内装を変える必要があるとした。その上で「学生参加型の食堂作り」の提案をし、学生の意見をもとに新メニューを作ること。内装変更には建築学科生に協力を要請すること。Takeout方式を導入すること、などがあげられた。大学にまかせてしまうのではなく、学生が協力するという姿勢が共感できるプレゼンであった。



法学部教職課程履修者で構成された「十人十色」は、授業がなくても来たくなる大学をつくるため、摂遊空間と命名するカフェや集いの場が必要だと主張した。在学生が楽しめることはもちろん、大学の雰囲気が良くなることで学生の交流が増え、講義の空き時間がより有効に使えとした。また、近隣の大学4校に足を運び見学した結果をまとめ、摂南大学との比較を行った。

他大学には学生が座って話をできる場所がたくさんあるが、本大学にはない。また、食堂や談話室が閑散としており、学生が行く施設がないと主張した。他大学の見学だけに終わり学生の声が聞けなかった点、他大学のキャンパスには活気があるとしながら閑散とした写真しか得られなかった点が残念であった。しかし、プレゼンテーションは他チームより長けていたと言えるだろう。全チームの中で唯一音楽を利用し、写真を多用することで、色彩感があり、観客の目をひくスライドを作り上げた。結果、学長賞を受賞した。



これまでの3チームは施設の環境を整えるよう求めたが、残り3チームは学校行事や学びの環境を整えるよう提案した。

「チームスイパラ」は運動する機会を増やそうと、体育祭を新たな学校行事として実施することを提案した。学内にはトレーニングセンターや人工芝グラウンドなど施設が充実しているのに対し、学生が利用していないこと、運動不足の学生の割合が67%もあるという問題点を指摘。体育祭の必要性を主張した。ゼミの一環として取り入れることで参加率を上げる、学部対

抗にすることで学部内の団結を高めることを目標とした。学生のアンケートでは豪華景品があることや、手作りの賞状が貰えるなら参加したいなどの声が上がった。ただ運動するだけでなく、目標があれば、学生も意欲的に参加してくれるのではないかと考えた。発表の後半は、学部や学年の壁を越え人の輪が広がる、勉強の効率が上がる、運動施設の認知度を上げることができることといった体育祭のメリットを強く主張した。人との輪を広げ、精神的にも安定した生活を送ろうと考えた。体育祭を通して運動への関心を持ってもらい、これからは積極的に運動をしていくきっかけをつくることで、心身共に活気のある摂南大学での大学生活を送ろうと提案した。

「チーム06」は、人を大切にする大学をつくるために、全学部が集まれる場を法学部から発信してゆこうと、学園の経営理念である四位一体を実現する場が必要だと主張した。学生が声を発信する場、お互いが繋がる場のために、学生生活向上委員会を作る。具体的には、カリキュラムにゼミ単位でのディベートを取り込む。これにより、自分の意見を言う力や他者の意見を聞く力が身につく、コミュニケーション能力が上がるのではないかと考えた。また、公式行事としてゼミマッチのスポーツ大会を開くことも提案。強制的な参加であっても、学生同士の交流の機会が与えられ、まとまりができると主張した。最後に、サークル活動を充実させることを提案。部活動と違いアルバイトと両立できるとし、活動費用の助成と施設使用許可を求めた。人を大切にすると、学生教職員その他大学にかかわる人が互いを認め合うことである。これがお互いの居場所をつくることに繋がると主張した。精神面を改革しようとした唯一のチームであった。学生のことだけでなく、大学の経営理念を見つめることで双方の歩み寄りを期待するという、これからの摂南大学に必要な考え方を唱えた。

唯一学問について言及したのは、外国語学部家口ゼミだ。学生が学びたい摂南大学、研究機関としての摂南大学の2点をテーマに、所属する外国語学部を例にとり提案をした。インセンティブを与えることで英語力を底上げさせ、英語を使って国際協力や英文学の研究へと幅を広げてゆく。

学生のモチベーションを底上げすることで、

**学生のモチベーションを底上げする
外的動機づけによるアプローチ**

□ TOEIC、英検等、各資格所得時のインセンティブの壁を低く細かくする

現在 (外国語学部の場合) 英検準一級、TOEIC800点以上	改善後	
10万円	400点	1万円
	450点	1万円
	500点	1万円
	550点	1万円
	600点	1万円
	650点	1万円
	700点	1万円
	750点	1万円

僕でも飛べた！

学習意欲が高まり、より学力の高い学生を輩出できる。また、学生が教員の悪いところを指摘できるSTAを設立する。そして、授業アンケートをイエス・ノー方式にし、学生も教員も即座に良い点・悪い点を見つけることができるようにする。これにより、学生が受けたと思える講義の実施を実現。さらに、大学で学んだことを生かす場として、ティーチングアシスタント制度の確立を提唱。進路が決まり時間に余裕のある4回生を雇ってブースを作り、専攻・分野に特化した質問に答える。インセンティブに働きかける一方で、アカデミックなものを要求するという、相反する意欲である。これらが方向性を同じくして一人の人間に集約されることがおもしろい。学問はわくわく感と知的好奇心を同時に満たすべきだとした。学生には多様なニーズがあり、どの程度大学が答えられるのかが問題となるだろう。しかし、学びの根本を見つめなおすことは、大学という教育機関が最優先で取り組むべきことではないだろうか。

それぞれのチームが、各々の視点から様々な提案をした。このなかで、複数のチームが学生の交流を深めたいと考えていた。交流は学生間で自発的に行なうものではあるが、摂南大学にはきっかけが少ないのではないかと皆考えていたようだ。施設をつくることはもちろん、交流の場や団体をつくることも、学生が個人で考えているだけでは何も始まらない。これらの提案を受けて、今後大学がどう対応してゆくのかが楽しみである。

- 学長賞**「摂南空間～授業がなくても来なくなる大学～」
[十人十色] (法)大東、今村、古野、竹廣、許、小瀬良、奥野、大林、藤枝、藤野
- 図書館長賞**「摂南<大学>について」
[家口ゼミ] (外国語)崎山、大浦地
- 学生部長賞**「より良い学生生活を送る為に」
[☆SATOIゼミ★オールスターズ☆] (外国語)藤門、城領、重松、栗野

摂大文化大賞入選者発表

2009年度摂大文化大賞（図書館主催）の作品募集の結果、リテラル部門（評論、エッセイなど）に2点、ビジュアル部門（写真、絵画等）に23点の計25点の応募がありました。公開投票結果も加味して審査の結果、つぎのとおり入選作品が決定しました。

賞	作品名	部門	所属	年次	氏名
大賞	あなたはどんなミカンがお好きですか？	ビジュアル(コラージュ)	工学部	4	米田 匡志
リテラル部門 優秀賞	オックスフォードの夏	リテラル(エッセイ)	外国語学部	4	上村 あや
ビジュアル部門 優秀賞	舞	ビジュアル(書道)	工学研究科	1	田中 沙知
人気賞	ハイ、チーズ	ビジュアル(写真)	工学部	3	三好 利洋
入賞	① ジャンプ!!	ビジュアル(写真)	法学部	3	北村 隆典
	② 八坂神社	ビジュアル(切り絵)	工学部	3	田中 秀和
	③ 小栗 旬	ビジュアル(点画)	外国語学部	3	須佐美 健



大 賞



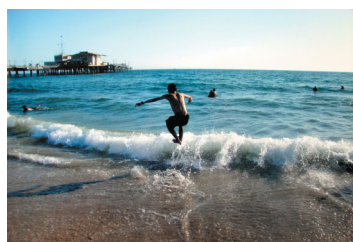
リテラル部門 優秀賞



ビジュアル部門 優秀賞



人気賞



入賞①



入賞②



入賞③

<編集後期>

昨年実施しました図書館アンケートにご協力くださいました皆様にお礼申し上げます。本館、分館合わせて200名を超える方から回答が寄せられました。集計結果はホームページ等でお知らせする予定です。アンケートから、静寂性の確保やパソコン環境の整備など課題もみえてきています。4月から新たな領域の学部・学科を新設し、6学部12学科となるのに合わせ、専門分野に即した選書やさらなる利用者サービスの向上に努めていきます。



「学而」摂南大学図書館報 No.91 2010.3

編集・発行 摂南大学図書館

本 館 〒572-8508 大阪府寝屋川市池田中町17番8号 TEL.(072)839-9111

分 館 〒573-0101 大阪府枚方市長尾峠町45-1 TEL.(072)866-3102

URL:<http://www.setsunan.ac.jp>